

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：34202

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04481

研究課題名(和文) 認知発達検査における一般妥当性のある反応を妨げる要因 - 生涯発達の観点からの検討 -

研究課題名(英文) A cross-sectional life-span developmental study of inhibitory factors limiting desirable responses in cognitive developmental testing

研究代表者

清水 里美 (Shimizu, Satomi)

平安女学院大学・子ども教育学部・教授

研究者番号：80610526

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学生から高齢者までを対象に成人期以降の認知発達のプロセスについての基礎資料を得ることを目的としていた。とくに、不良定義問題である「財布探し」課題に焦点をあて、この課題を含む新版K式発達検査、時計描画テスト、対人応答性尺度などを個別に実施し、一般妥当性のある反応を妨げる要因について検討した。その結果、新版K式発達検査2020年版の改訂において成人向けの項目を充実させることができた。また、「財布探し」課題の不通過分析から他者の視点の推測不足を、時計描画テストの反応分析から教育歴との関連を報告した。これらの成果は、成人期の認知発達に関するアセスメントに役立てることができると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、新版K式発達検査の成人向け項目を充実させ、2020年版の改訂につながった。新版K式発達検査は、未熟児の発達評価、乳幼児健診、就学相談、福祉施策の適用などに関わり、全国の相談所、保健所、病院などですでに広く用いられているものである。また、認知症のスクリーニングで活用されている時計描画テストについて、幅広い年齢を対象に得点を分析し、低得点には加齢だけでなく、教育歴も影響することを示した。本研究は、京都国際社会福祉センター(社会福祉法人京都国際社会福祉協力会)および日本文化科学社の協力を得て実施しており、得られた成果はこれらの機関を通じて今後も継続的な活用が期待できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this present study was to clarify the process of cognitive development in adulthood and beyond. In addition, this study sought to understand qualitative differences between successful and unsuccessful examinees of the Plan of Search Test in the Kyoto Scale of Psychological Development (KSPD) used for assessing developmental disorders. We gave KSPD, the Clock Drawing Test (CDT), and the Social Responsiveness Scale Second Edition to 321 subjects from college students to the 70s to examine factors preventing responses of general validity. This research led to the refinement of the 2020 version of KSPD. In addition, we reported a lack of inference of others' perspectives from the non-passage analysis of the Plan of Search Test and the effect of aging & shorter educational history on the lower CDT scores. These results may be helpful for the assessment of cognitive development in adulthood.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：認知発達過程 加齢に伴う発達の变化 新版K式発達検査2020 時計描画テスト 「財布探し」課題 SR S-2対人応答性尺度

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 知的能力障害の診断および重症度判定は、「療育手帳」(昭和48年、厚生事務次官通知)の交付や更新にあたって求められ、その結果に応じた福祉サービスが提供される。判定においては、重症心身障害児(発達状態が1歳未満)であっても、軽度の知的障害児者(理論統計上は、母平均から-2標準偏差以下-3標準偏差未満の知的能力を示す)であっても、同一の尺度を用いることができると都合がよい。そのため、発達の順序尺度にあてはめて対象者の発達年齢を推定し、生活年齢との比でもって発達指数を算出する「新版K式発達検査2001」(生澤・松下・中瀬, 2002)などが広く用いられている。ところが、平成17年に発達障害者支援法が施行されて以来、検査結果の解釈が難しい相談事例が増えている。成人以降に生じた社会生活上の不応答から発達障害が疑われ、支援のために知的能力の評価が求められるようになったからである。このような事例では、基準を満たす反応が得られない場合の解釈として、知識や技能の未獲得によるのか、適応上の問題から生じた情緒反応なのか、あるいは加齢による一般的な反応なのかの判別が容易でない。なぜならば、従来の発達検査は乳児が成人になるまでの発達過程でどのようなことができるようになっていくのかといった観点から作成されており、成人期以降の加齢に伴う変化については十分な資料が得られていないからである。例えば、新版K式発達検査2001に含まれている「財布探し」という課題がある。課題の内容は、菱形(縦8cm, 横5cm, 図の下方が5mm程度開いているもの)が描かれたB5判の用紙を受検者に示し、検査者が口頭で、「これは広い広い運動場です。短い草が一面に生えています。もしあなたが、この中のどこかで、お金のいっぱい入った財布を落したと考えてください。その落した財布をきつと見つけ出そうと思ったら、どういうふうに出て探したらよいでしょうか?この入口(図の下方の開いているところを指さす)から入って、あなたが探すときに通る所を、この鉛筆で、ここに描いてください」と教示し、受検者に自身の探索方略を描線で表現することを求めるものである。評価は2段階になっており、合理性、計画性、一貫性のある探索反応が「財布探しⅠ」通過水準、合理性、計画性、一貫性に加え、探索の詳しさも十分な反応が「財布探しⅡ」通過水準となる(生澤・松下・中瀬, 2002)。この課題は、言語理解、論理的思考、プランニング、表象化能力の発達と関連すると考えられており(近藤, 1989; 楠, 2009; Howie, 2011)、9歳前後から「財布探しⅠ」の通過率が上がり、以降12歳にかけて「財布探しⅡ」の通過率が上昇する(中瀬, 1986)。ところが、清水(2016)が小学生346名、中学生110名、大学生162名に対し集団式でこの課題を実施したところ、12歳以降で不通過反応の割合が再び増加していた。12歳以降で見られた不通過反応は、年少児によくみられる、探索が1周で終わるため計画性が確認できない反応と類似していた。これが発達の未熟な反応と同質であるのか、加齢に伴う簡略化表現(小林, 1977)に類するものであるのか、あるいは別の問題であるのかは、他の認知発達課題の結果も含めて検討する必要がある。そのため、発達検査の対象年齢を成人期以降の幅広い年齢にまで広げ、加齢による変化を明らかにすることが求められる。

(2) 検査課題には、問題空間を一義的に定義することが可能な良定義問題(well-defined problem; Newell & Simon, 1972)と問題空間を定義することが困難な不良定義問題(ill-defined problem)がある。不良定義問題では、受検者自身があいまいな情報から一般常識的な課題目標を立て、妥当性のある回答を導き出すことが求められる。また、反応の表現も一般妥当性があるかを吟味しなければならない。先に挙げた「財布探し」課題は、運動場の広さや草の丈、落とした財布の形状などは示されておらず、不良定義問題に該当すると考えられる。すなわち、受検者はあいまいな情報を一般妥当性のある解釈で補う必要がある。したがって、そのとらえ方の多様性が12歳以降の基準を満たさない反応の増加に関連しているのかもしれない。ところで、日常生活では正答のない課題に対し、他者と協働して一般解を見出すことが求められる。全般的な知的発達に遅れがなくても、不良定義問題のような、あいまいな情報の処理において一般解を見出すことに困難さがあるとすれば、それは何らかの不応答につながるのではないだろうか。成人の発達障害者支援においては、あらゆる観点から不通過反応を解釈することが求められる。そこで、不良定義問題を含む既存の認知発達検査課題について、成人期以降の標準データの収集をおこない、基準を満たさない反応が生じる要因を特定することが望まれる。

2. 研究の目的

発達障害概念の広がりにより専門機関において成人の相談事例が増加するとともに、発達に関するアセスメントがより重視されるようになってきている。しかしながら、成人期以降の加齢に伴う認知発達の変化についての知見は少ない。そこで、乳幼児期からの発達を評価する既存の検査課題を用いて、成人期から高齢期にかけての発達経過についての基礎資料を得る。さらに、人の情報処理過程における問題空間の理解やプランニングおよびその表現に関わる機能について、一般妥当性のある反応を妨げる要因を検討し、適応上の問題に関わる知見を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 採用する検査課題を選定するために、大学生 21 名を対象に予備調査を実施した。予備調査では、不良定義問題である「財布探し」課題を実施し、言語プロトコル分析をおこなった。「財布探し」課題は、新版K式発達検査 2001 に含まれているため、事前に発行元である京都国際社会福祉センター（社会福祉法人 京都国際社会福祉協力会）の研究協力を得た。また、収集すべき情報や検査全体の構成を検討するために、新版K式発達検査 2001 と WAIS-III 成人知能検査、情報処理に関連する検査項目として新しく考案した「正方形の数」「幾何学図形」「図形折紙」、認知症のスクリーニング検査で広く活用されている「時計描画テスト (CDT)」、および適応上の問題に関連する指標として「発達障害の要支援度評価尺度 (MSPA)」も併せて実施した。

(2) 本調査における検査対象は 20 歳台から 70 歳台までの定型発達者とし、地域と男女比および教育歴を可能な限り統制した。教育歴については、研究開始時点における最新の国勢調査結果をもとに年代別、男女別の予定数を決定した（表 1）。

本調査では、新版K式発達検査 2001 と「正方形の数」「図形折紙」「幾何学図形」、CDT、および検査の所要時間の関係から MSPA に替え「SRS-2 対人応答性尺度 (SRS-2)」を実施した。「正方形の数」「幾何学図形」「図形折紙」については、予備調査の結果をもとに手続きや下位項目の適否を検討し、最終案を決定した。SRS-2 については、日本文化科学社の協力を得て、自己評定用と他者評定（本人をよく知る他者に依頼する）用の質問紙をあらかじめ検査対象者に配布し、検査時に回収した。「財布探し」課題と CDT については事後に課題に関する複数の質問も加えた。

検査者については、京都国際社会福祉センターの協力を得て、心理専門職の有資格者で心理検査経験者を全国規模で募集し、事前に講習を実施した。本調査は 2017 年度後半に開始し、2019 年度末に終了した。

倫理的配慮として、事前に所属機関の倫理委員会の承認を得た。また、研究協力者に対しての説明は口頭と文書にて行い、同意書への署名を得た。

4. 研究成果

(1) 本調査で収集した結果を表 1 に示す。すべての検査が実施できたのは、全体で 321 名であった。「正方形の数」「幾何学図形」「図形折紙」については、本調査の結果をもとに成人向けの検査課題としての判定基準が整えられ、新版K式発達検査の改訂における偏差値方式導入のための基礎資料として役立てられた。なお、新版K式発達検査の 2020 年版（以下、新版K式発達検査 2020 とする）は、本調査の結果も加えて、0 歳から 80 歳までの 3243 名のデータをもとに作成された。図 1 に新版K式発達検査 2020 の標準化資料における全領域の平均得点の分布を示す。手引書および解説書を公刊し、現在も臨床実践に活用できるよう普及活動をおこなっている。

表1 年代および教育歴別データ収集予定数と実際の収集結果

年代		卒業生										結果 男女 別計	結果 計
		小・中卒		高・旧中卒		短大・高専卒		大学・院卒		在学者*			
		予定	結果	予定	結果	予定	結果	予定	結果	予定	結果		
20歳台	男	1	1	9	5	2	3	7	8	6	10	27	56
	女	1	0	8	6	7	8	5	12	3	3	29	
30歳台	男	1	0	11	6	4	4	10	16	0	1	27	56
	女	1	1	10	2	10	12	5	12	0	2	29	
40歳台	男	1	1	12	9	2	5	10	13	0	0	28	55
	女	1	1	12	11	8	10	3	5	0	0	27	
50歳台	男	3	0	12	14	1	1	9	11	0	1	27	52
	女	2	0	13	10	7	12	2	3	0	0	25	
60歳台	男	7	4	12	11	1	3	6	7	0	0	25	51
	女	7	2	14	15	3	5	1	4	0	0	26	
70歳台	男	10	2	10	20	1	0	3	4	0	0	26	51
	女	11	4	12	15	1	6	1	0	0	0	25	
	男計	23	8	66	65	11	16	45	59	6	12	160	
	女計	23	8	69	59	36	53	17	36	3	5	161	
	計	46	16	135	124	47	69	62	95	9	17	321	

* 検査時点で専門学校、大学、大学院など何らかの教育機関に在籍していた者

(2) 新版K式発達検査 2020 の標準化資料から 2001 年版の年齢区分と対照できる 12 歳から 25 歳までについて、発達検査項目をそろえて得点を比較した。その結果、18 歳以降の年齢区分では、認知・適応領域においても、言語・社会領域においても、2001 年版データよりも 2020 年版データの平均得点の方が低くなっていた。郷間 (2006) や小枝他 (2003)、秋山・堀口 (2006) が約 20 年前に指摘した幼児期、学童期の子どもの発達の遅延現象が成人期まで及んでいる可能性が示唆された。

また、2020 年版データの 20 歳から 70 歳台について、年代ごとの平均得点を比較したところ、いずれの領域でも 50 歳頃から平均得点が明らかに低下しており、60 歳以降はとくに顕著であった。一方で、60 歳以降は標準偏差も他の年齢区分に比べ大きくなる傾向があり、個人差が広がる年代であることが示唆された。

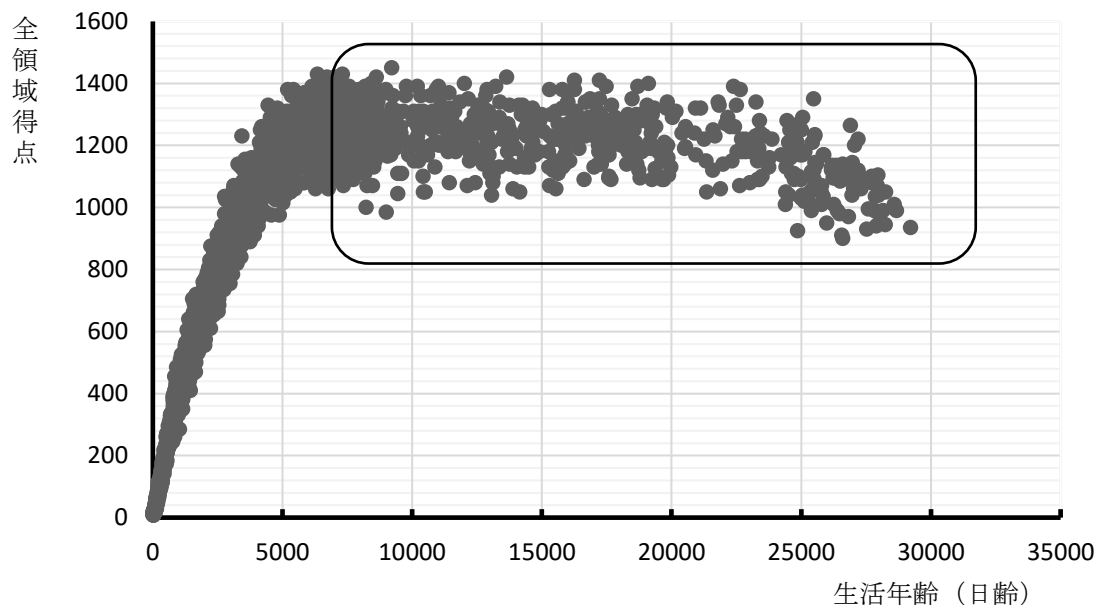
新版K式発達検査は、規模は異なるものの、およそ 20 年ごとに標準データの収集がおこなわれており、2020 年版は 3 回目の改訂になる。これまで収集されたデータをもとに各項目の 50% 通過年齢 (すなわち受検者の 50% が通過する年齢) を調べたところ、大きな変化がない項目、早くなっている (獲得年齢が促進している) 項目、遅くなっている (獲得年齢が遅延している) 項目があることがわかった。データ収集の時期による項目通過年齢の変動は、社会的な環境が影響しているものと考えられる。そこで今後の研究として、発達検査と併せて生活環境や養育環境の調査を行い、発達の促進や遅延に関わる要因を明らかにすることが求められる。また、海外の子どもの発達やその変化も調査し、発達と環境との関連から子育て支援への提言につなげることが望まれる。

(3) 「財布探し」課題については、大学生の反応内容と反応後の質問紙調査への回答結果をもとに、課題情報の把握、探索プランの生成、およびその表現といった過程から分析をおこなった。その結果、不通過反応においては、プランニングの段階における課題目標の理解不足や表現段階における他者の視点に関する推測不足が示唆された。このことから、成人の不通過反応は、コミュニケーション上の問題も併せて検討することが重要ではないかと考えられた。

「財布探し」課題の成績と SRS-2 の「社会的コミュニケーションと対人的相互交流 (SCI)」の自己評定および他者評定の結果についても比較検討した。SCI は、社会的気づき、社会的認知、社会的コミュニケーション、および社会的動機づけに関する尺度である。25 歳から 39 歳までの前期成人期群 71 名、40 歳から 54 歳までの壮年期群 79 名、計 150 名の結果を分析し、有意差はみられなかったものの、「財布探し」課題の不通過者では自己評定と他者評定の一致率が低い傾向や他者評定で基準値以上が多い傾向、II 通過者では自己評定で基準値以上が多い傾向がうかがえた。本研究開始後に、日本文化科学社と共同で計画した SRS-2 の成人版の標準化作業については今後進める予定である。

各国で認知症の診断に用いられている CDT については、予備調査および本調査で収集した 20 歳台から 70 歳台まで 331 名の反応を得点化し、性別、年齢、教育歴による違いを分析した。その結果、高齢群および教育歴の短い群では CDT 得点が低かった。高齢群では構成要素の一つである「数字」の描画に関わる得点が低く、教育歴が短い群では「数字」と「針」の描画に関わる得点が低くなっていた。このことから、加齢の影響は「数字」の描画に現れ、教育歴による影響は「数字」と「針」の描画に現れる可能性が示唆された。臨床的なアセスメントや認知症

図 1 新版K式発達検査2020の標準化データにおける全領域得点分布
(本研究で収集したデータは年齢 (日齢) 7300日以上、□で囲った範囲に該当)



のスクリーニングなどでは、構成要素ごとの得点を調べることで、対象者の特徴がより明らかになると考えられる。

<引用文献>

- 秋山 千枝子・堀口 寿広 (2006). 津守・稲毛式による現代っ子の発達の特徴 小児保健研究, 65, 331-337.
- 郷間 英世 (2006). 現代の子どもの発達の特徴とその加齢に伴う変化—1983年および2001年のK式発達検査の標準化資料の比較による検討Ⅱ— 小児保健研究, 65, 282-290.
- Howie, D. (2011). *Teaching students thinking skills and strategies*. London & Philadelphia: Jessica. Kingsley Publishers.
- 楠 凡之 (2009). 7~9、10歳の発達の質的転換期. 白石 正久・白石 恵理子 (2009). 教育と保育のための発達診断 (pp. 166-169) 全障研出版部
- 小林 重雄 (1977). グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック 三京房
- 近藤 文里 (1989). プランする子ども(青木教育叢書) 青木書店
- 小枝 達也・江原 寛昭・鈴木 隆男・平山 諭・神崎 晋・長田 昭夫 (2003). この20年間で乳幼児発達はどのように変化したか; 3歳児健診から 第50回日本小児保健学会講演集 268-269.
- 生澤 雅夫・松下 裕・中瀬 惇 (編著) (2002). 新版K式発達検査2001実施手引書 京都国際社会福祉センター
- 中瀬 惇 (1986). 新版K式発達検査の項目財布探し課題;横断的資料による反応の発達の分析 京都府立大学学術報告 人文, 38, 103-148.
- Newell, A. & Simon, H. (1972). *Human problem solving*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 清水 里美 (2016). 発達アセスメントのニーズと課題—新K式検査改訂版の作成をめぐって— 既存の項目の通過基準の検討 日本発達障害学会第51回研究大会発表論文集, 63.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 清水 里美, 松岡 利規	4. 巻 23
2. 論文標題 成人の時計描画テストに関する検討 - 定量的評価と性別・年齢・教育歴の影響 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 平安女学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 12 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中 駿, 足立 絵美	4. 巻 38
2. 論文標題 新版K式発達検査2001と2020の標準化資料の得点比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達・療育研究: 京都国際社会福祉センター紀要	6. 最初と最後の頁 3 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 郷間 英世, 田中 駿, 清水 里美, 足立 絵美	4. 巻 2
2. 論文標題 現代の子どもの発達の様相と変化 新版 K 式発達検査1983と2020の標準化資料の比較から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達支援学研究	6. 最初と最後の頁 99 - 114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51013/jadsjournal.2.2_99	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美, 大谷 多加志, 田中 駿, 原口 喜充, 郷間 英世	4. 巻 第22号
2. 論文標題 現代の成人の発達に関する検討 - 新版K式発達検査標準化資料の経年比較に基づいて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 平安女学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 59 - 66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美, 加藤 隆	4. 巻 30
2. 論文標題 大学生における財布探し課題の反応と課題認知の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 LD研究	6. 最初と最後の頁 224 - 231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32198/jald.30.3_224	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 駿, 中市 悠, 家森 百合子, 岩見 美香, 清水 里美, 郷間 英世	4. 巻 37
2. 論文標題 自閉症スペクトラム幼児の新版K式発達検査2001と 新版K式発達検査2020のD Qの比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都国際社会福祉センター紀要 発達・療育研究	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美, 加藤 隆	4. 巻 21-
2. 論文標題 発達検査課題における他者認識の評価に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 平安女学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 45-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20601/00002427	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美	4. 巻 22
2. 論文標題 心理検査を活用したアセスメント 新版K式発達検査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 LD・ADHD & ASD	6. 最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷 多加志, 清水 里美, 郷間 英世, 大久保 純一郎, 清水 寛之	4. 巻 30
2. 論文標題 幼児におけるじゃんけんの勝敗判断に関する発達段階の評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 142-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11201/jjdp.30.142	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷 多加志, 原口 喜充, 清水 里美	4. 巻 35
2. 論文標題 成人期の発達検査課題としての「正方形の数」課題の適切性 - 新版K式発達検査の成人級課題の精密化 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美, 加藤 隆	4. 巻 20
2. 論文標題 財布探し課題における不通過反応の要因分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 平安女学院大学 研究年報	6. 最初と最後の頁 65-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美, 大谷 多加志	4. 巻 19
2. 論文標題 新版K式発達検査2001成人版WAIS- 成人知能検査の比較分析-改訂版作成に向けての検討-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平安女学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美	4. 巻 59
2. 論文標題 シンポジウム 思春期を中心とした学校精神保健 保護者・学校・医療の同時面談システム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 409-413
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20615/jscap.59.4_409	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水 里美, 加藤 隆	4. 巻 18
2. 論文標題 臨床実践家による「財布探し」課題の不通過反応に対する解釈の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平安女学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷 多加志, 清水 里美, 清水 寛之	4. 巻 33
2. 論文標題 新版K式発達検査の「名詞列挙」の下位項目の適切性 - 2001版の下位項目の問題と改訂版の作成に向けて -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 京都国際社会福祉センター紀要 発達・療育研究	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田中 駿, 清水 寛之, 清水 里美, 足立 絵美, 郷間 英世
2. 発表標題 人間の発達曲線は何次式で表せるか 新版 K 式発達検査2020の標準化資料の分析から
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 清水 里美
2. 発表標題 新版K式発達検査の理解と活用
3. 学会等名 日本LD学会第33回大会（大会企画シンポジウム）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 駿, 清水 里美, 足立 絵美, 郷間 英世
2. 発表標題 新版K式発達検査2001と2020のDQの比較
3. 学会等名 第69回 日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郷間 英世, 清水 里美
2. 発表標題 新版K式発達検査2020-成り立ち・現在の役割・これから-
3. 学会等名 日本臨床発達心理士会17回全国大会公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水 里美
2. 発表標題 新版 K 式発達検査2020による発達評価 - 2001年版との比較-
3. 学会等名 日本LD学会第30回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水 里美, 大谷 多加志, 原口 喜充, 田中 駿, 郷間 英世
2. 発表標題 現代の成人の発達に関する検討(1) 新版K式発達検査2020年版標準化資料の分析から
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大谷 多加志, 清水 里美, 原口 喜充, 田中 駿, 郷間 英世
2. 発表標題 現代の成人の発達に関する検討(2) 言語・社会領域における検査結果の年代比較から
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水 里美
2. 発表標題 財布探し課題の臨床的解釈の検討-SRS-2対人応答性尺度との関連-
3. 学会等名 日本LD学会第29回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水 里美
2. 発表標題 新版K式発達検査における成人級課題の精密化(3) - 新設課題および既存課題の年代別性差の検討 -
3. 学会等名 日本LD学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水 里美, 鈴木 英太, 黒田 美保, 井上 賞子, 花熊 暁
2. 発表標題 発達障害のアセスメントと支援 - 性差についての検討 -
3. 学会等名 日本LD学会第28回大会 (自主シンポジウム)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水 里美, 大谷 多加志, 原口 喜充
2. 発表標題 発達検査課題における言語反応の分析 - 新版K式発達検査の改訂をめぐって -
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会 (ラウンドテーブル)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水 里美, 大谷 多加志, 原口 喜充
2. 発表標題 発達検査課題における言語反応の分析 - 新版K式発達検査の改訂をめぐって -
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水 里美
2. 発表標題 大学生における新版K式発達検査「財布探し」課題の不通過分析 - 言語プロトコルの内容から -
3. 学会等名 日本LD学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷 多加志, 清水 里美
2. 発表標題 新版 K 式発達検査における成人級課題の精密化(2) 「正方形の数」課題の検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水 里美
2. 発表標題 保護者・学校・医療の同時面談システム
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会第58回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 清水 里美, 大谷 多加志
2. 発表標題 成人の発達支援における検査の活用-定型発達者の新版K式発達検査2001とWAIS- の比較から -
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷 多加志, 清水里美, 清水寛之
2. 発表標題 新版K式発達検査における成人級課題の精密化 1 - 「図形折り紙」課題と「幾何学的推理」課題の検討 -
3. 学会等名 関西心理学会第129回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 津川 律子, 黒田 美保 (編著) 清水 里美, 他14名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 176
3. 書名 これからの現場で役立つ臨床心理検査【解説編】(第1部3章 発達検査 担当)	

1. 著者名 清水 里美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 128
3. 書名 発達検査課題の認知的要因の分析-他者認識の観点から-	

1. 著者名 新版K式発達検査研究会(編)・郷間 英世(監修)・清水 里美(著者代表)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都国際社会福祉センター	5. 総ページ数 148
3. 書名 新版K式発達検査2020解説書(理論と解釈)	

1. 著者名 新版K式発達検査研究会(編)・郷間 英世(監修)・清水 里美(著者代表)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都国際社会福祉センター	5. 総ページ数 209
3. 書名 新版K式発達検査2020実施手引書	

1. 著者名 船曳 康子 (コラム執筆 清水 里美, 他10名)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 129
3. 書名 MSPA (発達障害の要支援度評価尺度) の理解と活用 (特別寄稿コラム 1, 76-83担当)	

1. 著者名 下山 晴彦 (編集主幹) 伊藤 絵美, 黒田 美保, 鈴木 伸一, 松田 修 (編集) 清水 里美, 他118名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文光堂	5. 総ページ数 877
3. 書名 公認心理師技法ガイド (2章アセスメント技法 B発達検査 1) 新版K式発達検査の項, 128-133担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加藤 隆 (Kato Takashi) (90268318)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------